

山田真砂年句集『夜は昔の』

たちのぼる実感

間 恵子

山田真砂年。昭和二十四年東京都品川区生まれ。昭和六十年「未来図」入会。平成二年未来図新人賞受賞。平成七年俳人協会新人賞受賞。平成十一年未来図賞受賞。令和二年「稻」創刊主宰。本句集は『西へ出づれば』『海鞘食うて』に続く第三句集である。

梅雨明け後の七月二十日、著者は講師として新潟県俳人協会「花と緑」俳句大会の講師を務められた。演題は「俳句の方法」その中で「オノマトペとは、感覚を写し取り特徴的な形式を持つ新たに作り出せる言葉」と述べられている。本句集の中でも、紹介したいのは擬音語の自在で独自の世界である。

春三日月かさりこそりと母話す

母眠るまでを団扇のはたりはた

息遣い、呼吸を感じる二句。隣にいる母上との日々が凝縮されている。対象と呼吸を合わせるとき、音が立ちのぼってくる。擬音語・オノマトペの句は後段でも紹介したい。

また、著者が幾度も訪れているのは中東中央アジア諸国だ。

レバノンの片陰戦車二台分

ベドウィンの砂吹く中の昼寝かな

星飛ぶや神の名をもて銃撃てり

ユルタ出て夕焼けのほかなにもなし

部族内の結びつきが強い砂漠の民。紛争が隣り合わせの環境と血脈を見通すような眼差しに対峙したとき、謙遜が美德の異国人は目を反らしがちだが、いずれも果敢で平明な詠みである。

信濃早春どこ歩きても濡れてをる

春月の搾らばほのと苦からん

夜の地震のいんいんとして蚊にささる

とんばうの墜落したる形の死

新米や夜は昔の話して

創造する言葉がさりげなく、的確な季語で結ばれている。春の信濃の内陸独特の湿度。果実のような黄色い春月。いんいんとやってくる地震と幽かではあるが、確実に刺してくる蚊。空を飛ぶ宿命を負った蜻蛉の死。新米を味わう夜の喜び。現地へ赴き、五感を通して感じ、広い視野で空想し、実感を伝え、真摯かつ誠実に詠まれている。実感の句には普遍性がある。

ちよろちよろとちよろつちよろつと池の蝌蚪

先にも触れたが、本句集で最長の擬音、オノマトペである。言わずもがな蝌蚪は真摯に生きている。それに応えるちよろちよるなのだ。